

きょうと福祉倶楽部だより

2021年 9号

介護保険制度は利用者のオムツを替えたり更衣をさせたり食事をさせたりという行為を報酬化させた制度です。

みなさんはたとえば廊下に裸同然で並べベルトコンベアに乗った商品のように動かされ「芋の子を洗うような」機械的な入浴が嬉しい介護でしょうか？

お薬とご飯を混ぜて食べさせるお食事の時間が嬉しいでしょうか？

車椅子から落ちないように「拘束帯」でしばる。（禁止事項でも病院では理由を付けて行われています）

利用者さんが勝手にベッドから離れないように車椅子を手の届かない位置においていた施設もありました。

そんな馬鹿などと思われる人もいらっしゃるでしょう。

でもこれらは実際に行われているのです。

もちろんより良き介護を目指し、人が不足するなかでもがんばっている施設は存在しています。ですが、こうした施設が多数存在するのも現実です。

わたしたちのまち乙訓地域でも決してそういう事が起こらないと言う保障はありません。管理者の引継ぎもなく事業を継続する法人がありました。

そのデイサービスには人工呼吸器装着や気管切開の方などとても支援が難しいかたが利用されています。

わたしたちはその乱暴な運営に事故が起きる危険を指摘して是正を求めましたが、返事はなし。

そして事故は起きました。

自宅前の玄関までの階段からコミュニケーションも困難な要介護5のお年寄りを「ずり落とした」のです。その事実を知ったのはその現場を目撃した介護者の夫からの一報。しかし当該デイからはケアマネージャーには連絡がありませんでした。翌日早朝訪問し事故の態様を把握し事務所に戻った午前9時過ぎにもそのデイからは連絡がありません。

しびれを切らし電話でケアマネージャーが連絡をすると「新管理者」は不在。電話口の女性に聞くと事故があったのも聞いていない様子でした。新管理者から電話がその後来ましたが、昨日報告がなかった理由を問うと「ぼくは昨日休みでした」と。

驚きました。事故対応すらできないこと、そして前管理者の元では問題なく行われていた重度の方のケアが壊れていたことに。

そんな杜撰な運営がお年寄りを危険にさらし、恐怖を与えたのです。

危険にさらし、恐怖や苦痛を与える介護は人権保障とは対極です。

わたしたちの家族を預ける事業所、わたしたちが働く事業所は人権を守っているのか点検してみませんか？